

論文

長崎県生月島堺目地区のかくれキリシタン信仰

—— 多層的信仰の事例研究 ——

小 泉 優 莉 菜

KOIZUMI Yurina

序

「かくれキリシタン信仰」。日本におけるこの特異な信仰は、現代社会の中ではあまり知られていない。現代の日本においてはこのかくれキリシタン信仰は、過去の事物であるかのように認識されている。しかし、実際には現在でも長崎県下のいくつかの地域では篤く信仰され、人々の祈りはやむことがない。その「いくつかの地域」とは、長崎県生月島・外海地域・五島列島、の3地域である。本論文内において研究対象とする地域は、「現在でもかくれキリシタン信仰が存在する地域（信仰行事の行われている地域）」と限定をする。そのため、キリシタン遺跡や、キリシタン伝説の残っている諸地域は研究の対象外とする。

本論文では、長崎県生月島堺目地域における現在での信仰の様子を、調査から得た情報を基に述べてゆく。この地域では、現在では信仰組織自体は解散してしまっている。これについては本文中で詳しく述べるが、「信仰組織の解散」という状況の上でもなお、人々は信仰を続けている。さらに、堺目地区の島民は、同島の他の地域と同じように、神社の氏子であり、仏教徒でもあるという。このように複雑に信仰が絡み合う中で、人々はどのように神と対峙し、生活の中で折り合いをつけながら日々を送り、信仰行事に臨んでいるのかについて論じる。

本論に入る前に、かくれキリシタン信仰についての概説を簡単にしたい。

I かくれキリシタン信仰概説

序において、かくれキリシタン信仰は、「日本における特異な信仰である。」と述べた。かくれキリシタン信仰は、その名称が表すように、「キリスト教（カトリック）」が基となっている。

日本へのキリスト教は、1549年にフランシスコ・デ・ザビエルによって伝来した。当初、日本ではキリスト教を許可する権力者も現れ、日本におけるキリスト教の勢力は拡大の一途を辿った。しかし、豊臣秀吉による1587年の伴天連追放令や、長崎における26聖人の殉教、そしてその後、江戸時代を通して行われたキリスト教の禁教令により、日本におけるキリスト教は厳しい弾圧の時代に突入した。

一般的には、この弾圧時代を含めて、「かくれキリシタン」として認識されているが、学術的には、その年代区分を明確にするため、キリスト教伝来～禁教令の発布までを「キリシタン期」、江戸

時代の弾圧期を「潜伏キリシタン期」、明治になり禁教令が解かれた後もなお、自身らの信仰形態を貫き通した者たちのことを「かくれキリシタン」と呼ぶ⁽¹⁾。

幕府による厳しい弾圧は、日本における様々なキリスト教と関連する事物を破壊し、抹消しようとした。これにより、日本におけるキリスト教に関する事物はほぼ消滅してしまったものの、しかし、一部ではその姿を変化させ、巧みに日常の生活の中に潜伏し、現在でも信仰が受け継がれているのである。

幕府による弾圧の中で、今回取り上げる生月島に、なぜかくれキリシタン信仰が生き残ったのか、ということについては諸説ある。代表的な説としては、「中央から離れた島という地理的な理由により、幕府の目が届きにくかった。」というものや、「重要な捕鯨の島であったために、多少の目こぼしがあった。」という説もある。ただし、生月島においても弾圧による殉教は出ており、それによる伝説や聖地が存在する。時折、「見せしめ」的に弾圧を加えていることから、著者は後者の要素が強かったのではないかと考えている。しかし、本論文はこの件に関しての研究を目的としていないため、詳細な考察は行わない。

かくれキリシタン信仰において、「何を祀っているのか。」という疑問については、皆が疑問に思うところであり、学会や、個人から質問を多く受けるところでもある。しかし、これについては、明確な回答はできない。それは、かくれキリシタン信仰は何か「明確な信仰対象」を持った信仰とはいえず、祈りの対象は、人・信仰組織・地域・家によって違うからである。聞き取り調査を進めてゆくと、驚くべきことに、同じ信仰組織の中でも人によって信仰対象が異なることもある。例えば A という信仰組織の A 氏に信仰対象を聞いたところ、「高いところにいる神様に拝んでいます。」と答えたが、同じ組織の B 氏に同じ質問をしたところ、「(かくれ) キリシタンのご先祖様に。」という答えが返ってきた。これは一例ではあるが、このように信仰対象に対する概念は、固定化されていない。

また、地域によって、偶像も異なりを見せる。写真 1・2 は生月島堺目地区の信仰対象である「御前様」であり、写真 3 は外海地域や五島列島で祀られている「マリア観音」である。



写真 1・2 生月島堺目地区木場の御前様 (2014 年 7 月 27 日筆者撮影)

(1) 先行研究と調査方法

今回のテーマと関連する先行研究としては、キリシタン史の研究を行った結城了悟『キリシタンになった大名』(1999)、海老澤有道『洋楽伝来史』(1983)、民俗学や社会学的な面から研究を進めた田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』(1978)、正木慶文『長崎隠れキリシタン記』(2003)、片岡弥吉『長崎のキリシタン』(1989)、丸山孝一『カトリック土着』(1980)、宮崎賢太郎『カクレキリシタンの信仰世界』(1996)、音楽学的な面に特化した先行研究としては、皆川達夫『洋楽渡来考』(2004)、竹井成美『南蛮音楽 その光と影』(1998)、などが挙げられる。しかし、これらの先行研究においては、「信者の目線」、そして「かくれキリシタン文化全体の概観」という視点が欠如している。ゆえに本研究では参与観察を中心とし、調査・考察を進めてゆく。



写真3 長崎県外海地域 波崎家のマリア観音
(2013年6月6日筆者撮影)

自身の研究は、フィールド・ワークを中心としたものである。従来のかくれキリシタン信仰に関する研究では、調査者が現地に泊まり込むというような、地域密着型の研究は行われてはこなかった。先学においては、信者と同じ目線に立つことなく、この信仰について考察し、記述されている。しかし、それでは本来の彼らの生活の鼓動から生み出される信仰、そして文化を知り得ることはできないのではないか、と筆者は考えている。そのため、自身の調査では、信者宅に宿泊し信仰生活の様子を観察し、信者たちの地域行事に積極的に参加しているほか、時には共に農作業を行うなどを行っている。その結果、信者たちの日々の信仰に対する姿勢や、生活の中での信仰の様子なども知ることができた。信者により近い目線で論じていることも筆者の調査・研究の特色であるといえる。2010年の調査開始から過去6年にわたり調査を進める中で、研究協力者のかくれキリシタン信者の自宅に、長期間の滞在を重ねることで、地域の中での信頼も得ることができ、心性の深い部分までの調査も可能となった。これまでかくれキリシタン信仰は、その歴史的状況も相まって、信者によって積極的に語られてはこなかった。しかし、このように年月をかけた調査に基づき進める本研究は、この信仰に対するこれまでの見解に一石を投じるものとなるであろう。さらにいえば、この信仰は現在、組織の解散・消滅が深刻化しており、調査・研究のできる最終段階に入っている。失われてゆく日本の信仰・文化・伝統を記録し後世に伝えることは、私たち研究者の使命でもある。

II 生月島堺目地区の事例研究

本論文では、生月島堺目地区における事例の研究を行う。今回、この地区を取り上げる理由は、この地区の信仰の多層性を示したいと考えるからである。

かくれキリシタン信仰は、後継者がおらず、また、信仰行事を執り行わなくなる者も多いため、組

織の解体が進んでいるのが現状である。今回例として示す堺目地区の「木場組織」も実際のところ、信仰組織自体は解散している。しかし「かくれキリシタン信仰」はこの地域から消えてしまった訳ではない。彼らは、信者らの協力のもと、「お堂」を建てることにより、「信仰」の行為自体は行っている。信仰形態の変化は同島の他地区のかくれキリシタン信仰においても見られる。しかし、信仰組織を解散した後も信者らが自らの手で信仰活動を継続しているのは、この地区でしか見られないのである。では、実際にどのように信仰行事を行っているのか、について見てみよう。

(1) かくれキリシタン信仰行事「どよなか様」の事例

今回事例として提示するのは2014年7月27日に行われた「どよなか様」と呼ばれる儀礼である。この行事は各家庭に祀られている、またはしまわれている御神体や聖具を取り出し、虫干しをすることに重点を置いている。また、そのような行為やその名称から、本来は「土用」の日であったものが、かくれキリシタン信仰と混合したのではないかと考えられる。虫干しをするためには晴れていなければならない。信者は次のように語る。「どよなか様ん時は、かんならず晴れるとです。予報で雨च्छूーても晴れて、虫干しが（できます）。」しかし、その言葉に反し、調査年の行事日は朝から細かな雨が降っていた。行事の開始される朝8時になっても、雨は止んでいるものの、空気は湿気り、今にも雨の降り出しそうな天候に変わりはなく、一度は信者らも虫干しをあきらめ始めた。が、そんな中でもおらしょの唱え上げが始まった。すると、唱え終わる前に日が燦々と差し、どよなか様行事の施行が可能である、と信者たちが判断する、という光景に出くわした。これについて信者の岳下氏は「信仰なんです。これが。」というように語っている。

どよなか様の祭祀は次のような順番で行われる。

① 人々が集まると、おらしょを唱える。



写真4 「お堂」の中でおらしょを唱えるかくれキリシタン信者たち
(2014年7月27日筆者撮影)

- ② おらしょを唱え終わると男性らによってお堂から聖具が出される。



写真5・6 「お堂」の中には「おてんべんしゃ」「お札」「お水瓶」「御前様」などがしまわれている。
(2014年7月27日筆者撮影)

- ③ 聖具が全て干されるとその周りに集まり、虫干しを見守る。



写真7 昔の思い出などを語りながら虫干しを見守る信者たち
(2014年7月27日筆者撮影)

- ④ 1時間ほど後、再びしまい込む。



写真8 1つずつ丁寧にしまう信者たち (2014年7月27日筆者撮影)

⑤ 全てをしまい終わると再びおらしょを唱える。

⑥ 最後にその場で直会が執り行われる。直会の際も、箸を持つ、酒を飲む、などの動作のたびにおらしょを唱える。儀式は終了となる。



写真9 一動ずつ祈りを捧げる信者たち（2014年7月27日筆者撮影）

写真10が、行事の際に撮影した集合写真である。一見して分かるように、多くの人々の協力のもと、行事が行われていることが分かる。木場地区では取り決めにより、1件から1人の参加者を出す。本来はその家の主が出るのが望ましいが、不在時など、近年では、場合によっては妻の出席も認められるようになったという。しかし、女性が聖具に触れることは、現在でも固く禁じられている。

江戸の潜伏期以来、かくれキリシタン信仰は男性の信仰であった。竹井成美は著書『南蛮音楽 その光と影』の中で、「納戸部屋に入る時、古老に「生理じゃなろうね」と面と向かって聞かれ、男女平等と叫ばれている世の中でくらししてきた者にとっては大きな驚きを覚えた。⁽²⁾」と述べている。こ



写真10 集合写真（2014年7月27日筆者撮影）

それは約 30 年前の出来事で、本来ならば納戸部屋に女性は入ることさえ許されていなかった。女性が入れるようになってきていることから、そのころには信仰内の規律が若干緩くなっていることが分かるが、やはり、女性のケガレを嫌う信仰であることには変化が見られない。

筆者も調査を進める中で、台の上に置かれた聖具が落ちそうになり、自然とそれを拾い取ろうと手を伸ばしてしまった時に「触っちゃいかん!!」と複数の信者に叱られた経験をした。そのように信仰における禁忌は固く守られている。

(2) 堺目地区の祭礼における女性の参加

それでは同地区のかくれキリシタン信仰以外での祭礼では、女性はどうに参加しているのだろうか。これについて、2014 年 10 月 6 日に行われた生月島住吉神社の「おくんち」を例に挙げよう。住吉神社の祭礼は、堺目地区の島民が中心となり執り行われる。おくんちでは島内を神輿が練り歩き、その行列には多くの付き添いが連なる。実は、写真に写っている者たち全員がかくれキリシタンの末裔である。潜伏キリシタン信者（かくれキリシタン信者）は幕府の目を逃れるため、形式的に、または名目上は寺社に所属していた。つまり、彼らはかくれキリシタン信者であり、仏教徒であり、そして神道に対する信仰をも持っているのである。

注目したいことは、行列では女性も祭具を持ち、男性と一緒に練り歩いている、という点である。これについて有村清涼氏（大正 13 年生 現在 91 歳）に聞き取りを行ったところ、「んや。本当は、昔は女の人参加はなかった。でも、やる人がいなくて、参加するようになったねぇ。」という答えが返ってきた。ここから、かくれキリシタン信仰とその他の信仰の類似点と相違点が見えてきた。

まず類似点は、「信仰行事に参加する者が減少することで、女性の参加が認められるようになった。」ということである。そして相違点は、「住吉神社の祭礼では女性の行事への直接的な参加が認められるようになったのに対し、かくれキリシタン信仰では認められているのは参加のみ。」ということである。かくれキリシタン信仰は神道的な要素が強い、と先行研究ではいわれてきたが、これらのことから、単に神道の要素が強く出た信仰であるとは言い切れないのではないか、と現段階では考えている。だが一方で、女性の参加が限定されている祭りは日本各地に存在することもまた確かである。日本各地で、人数の減少により女性が参加する、という同様の事態が起きており、かくれキリシタンのような部分参加を認める祭りや、完全参加を認める祭り（例えば阿波踊りなど）、また、参加不可能な祭りもたくさんある。ゆえに、「おくんち」が女性完全参加であることとの比較だけでは、キリシタン信仰の独自性と切り切ることは今の段階ではできない。



写真 11 島を練り歩く神輿（2014 年 10 月 6 日筆者撮影）

(3) 集団で信仰を行う

では次に、「集団で信仰を行う」ということ、そして「彼らにとって信仰とは何なのか」という点について、考察したい。

先述しているように、木場地区のかくれキリシタン信仰の信仰組織自体は「解散」という状況にある。しかし、信者たち、厳密に言えば元信者たちはおらしょを唱え続け、全てではないにしろ、信仰行事を執り行い、そして禁忌を守り続けている。

このようにして信仰を行い続けられることの理由の一つとして、「集団」としての地域的なつながりが強いことが考えられる。同島の他地区の寺社の祭礼調査を行った時、そこに参加する島民はわずかであった。中には役員のみ参加で短縮した行事を行い、終了としたところもある。しかし、それらと比べ、この地区の行事は大変盛大に行われ、その参加人数も道中賽銭を渡す者も入れると100人以上となった、と祭りの役員はいう。また、それだけではなく、日頃から公民館での活動なども盛んで、正に地区の住人が一つの「共同体」として生活を送っていることが分かる。

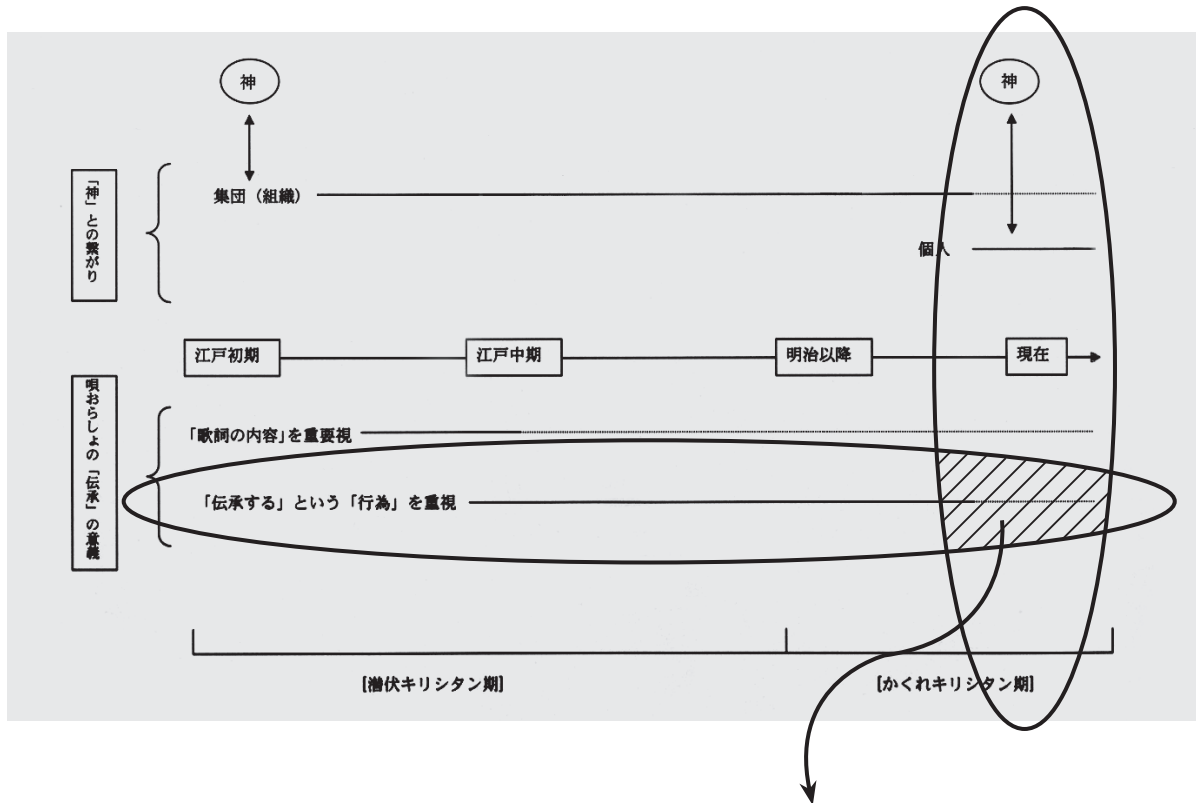
また、木場地区では他地区とは違い、信仰組織の解体後も多数の人々が信仰を守っている、という特徴も見られる。他地区では組織の解散後は個人での信仰行為が主となる。しかし木場地区では組織の解体後も多くの人々が神を祀る。本論文では、「祈る」という行為について、彼らの共同体精神から考察してゆきたい。

この集団での祈りは、かくれキリシタン信仰の根本であると考えられる。集団での祈りにより、宗教的指導者のいない中でも約300年間、自らの信仰を、その姿を変化させつつも維持してきたのだろう。

例えば、かくれキリシタン信仰では「唄おらしょ」と呼ばれる、この信仰特有の唄が存在する。元々ラテン語の「Oratio（祈り）」という言葉が潜伏下で訛り、この「おらしょ」という言葉となったとされている。唄おらしょは唄そのものも信仰の中で大切な存在ではあるが、これまでの筆者の研究から、「声を合わせて唄う」という行為自体にも大きな意味があったのではないかと推察している。以下に、この「唄うという行為」に着目し、集団で信仰を取り行うことと、個人で信仰を行うことについての違いを見たい。今回は比較の例として、堺目・木場地区と同様に、かくれキリシタン組織自体は解散してしまい、現在ではほぼ個人単位で信仰活動を行っている村川組の例を見る。

村川組のように組織が解散し、その後、個人間での信仰が進むと、唄を唄う機会が消滅し、唄の忘却が始まる。このことは「なだらかな唄の消滅」をも意味する。現に村川氏は唄おらしょを口ずさめはするものの、今ではほとんど唄う機会の無くなった《さんじゅわん様のお唄》《だんじく様のお唄》などの唄おらしょは、一人ではあまりうまく唄えなくなっている、という現実もある。

拙稿「近現代におけるかくれキリシタン信仰——信仰形態の変化要因に関する一考察——」⁽³⁾および「長崎県生月島におけるかくれキリシタンの唄おらしょ——音楽的事例研究——」⁽⁴⁾において筆者は、山田地区かくれキリシタンの唄おらしょを例にあげ、聖書との比較研究を行うことにより、教義を伝えるための唄が、その「唄うこと」自体に意味を持つようになったと述べた。そして、この「唄う」「声を合わせる」という行為は神との繋がりだけではなく、信者同士が互いに繋がり、信頼し合う、という点において重要な行為なのだ結論づけた。それが「信仰の繋がり解体＝組織の解体」という中で、その存在の理由がもはや無くなり、「集団（組織）対神」において「集団」としてまとまる



神と人との繋がりが「集団→個人」に変化したことにより、伝承が行われなくなる。その結果、唄の消滅が進む。

ために必要であった唄が、「個人対神」という信仰形態の変化の中では、もはや不要になってしまう理由だとも考えられる。逆に、同じように組織自体は解散しても、共同体としての意識が崩れなければ、さらに言えば、集団で信仰活動を行うという行為を守っていれば、この唄おらしょが消滅しても集団としての「信仰」は守られ、受け継がれるのだとも考えられる。

現に堺目地区のかくれキリシタン信仰行事を見ると、唄おらしょは現在、存在しない。しかし、さきほどから述べているように、信仰自体は続けられている。皆川達夫『洋楽渡来考』には約30年前の堺目地区の唄おらしょが録音されているが、現在、信者に唄おらしょの聞き取りをしても「うちにはなか。」という言葉しか返ってこない。そのため、「いつから唄わなくなったのか。」「なぜ唄わなくなったのか。」ということに関しては、現段階では分かっていない。引き続きの調査を行う。

しかし、この事例からは、「唄」が「集団(組織)対神」という関係性の中では重要な役割を担い、また、その関係性が崩れることは唄の消滅をも招く、ということの良い例であろう。

このように、信仰の中の一つの文化である「唄」という視点から見ても、同じ意識を持つ共同体が、集団としてかくれキリシタン信仰を行う重要性が分かる。また、多数の人が集まり同じ所作やことばを発するという行為は、文化の変容をより緩やかにし、急激な変化の抑止に繋がっていることが考えられる。

そしてそのことをかくれキリシタン信者たちは、彼らの無意識下で理解し、また、求めているのではないかと考えられる。その象徴となっているものこそが、堺目地区の「お堂」である。お堂は先述したようにかくれキリシタン信仰の中で用いられる聖具がしまい込まれている小屋である。元々堺目

地区ではお堂に合祀する、ということは行っておらず、各家庭で聖具の管理を行っていた。しかし、信者の高齢化や後継者の不足、などといった理由から信者らの話し合いで「このままの形式で信仰を続けてゆくのは難しい。」として、平成7年にお堂を造り、そこにまとめて聖具を管理し、祀ることを決めたという。そして、それと同時に組織を解散させ、家ごとの神様ではなく島の先祖の神様、という認識を持ち、集団での信仰が始まったのだと信者らは語る。このような信仰に対する姿勢からは、「組織＝信仰」ではなく、「集団＝信仰」であると、かくれキリシタン信者は考えているのだということが分かる。

Ⅲ 他文化との接触

かくれキリシタン信仰はキリスト教カトリックを基にしつつも、その変化の過程で様々な風土と混合し、現在の姿となった。そのため現在では、基となっているキリスト教とは教義や宗教的指導者の有無、また信仰の対象などの点で大きく異なっている。かといって、元々あった神道や仏教の信仰形態と同一の物になったのかということそうでもなく、様々な要素を混合した、特異な信仰の姿を形成するようになった。そのため、このかくれキリシタン信仰を理解し考察を進めてゆくためには、かくれキリシタン信仰のみを研究するのではなく、それを取り巻く外部の環境を見てゆく必要があると考える。

以下に、その「文化の摩擦と融合の可能性」についての試論を、堺目地区のかくれキリシタン信者たちの行っている神道行事から行ってみたい。

(1) かくれキリシタン信者の行う神道行事

本章では、2章において取り上げた「おくんち」行事の考察を行う。住吉神社は、表・中・底筒男神ほか3柱を祭神とした神社である。住吉神社の氏子は、主に堺目の住民たちによって構成されている。その堺目の住民たちは、現在ではかくれキリシタン信仰をやめてしまった者が多いが、元々は地区全員がかくれキリシタン信者であり、かつ、寺の檀家でもある、という何重にも重なる信仰を持つ人たちである。さらに、「元かくれキリシタン信者」である、といっても、熱心な元信者は現在でも年間で決まった「大切な行事の日」には「お堂」に集まり、かくれキリシタン信仰の信仰行事を行っている。このような信仰や宗教との共存は堺目地区だけではなく、その他二つの地域でも同じようになされている。このこともかくれキリシタン信仰の特徴といえる。

ここで筆者は「熱心な元信者」と彼らのことを表記するが、この表記については今後とも考えてゆかねばならない。彼らは現状としては序でも述べたように、「かくれキリシタン信仰組織は解体し、『事実上』無くなっている」。しかし、神を敬い、また信仰行事を行うなどして、「信仰自体は残っている」。彼らが熱心に信仰している姿は「かくれキリシタン信仰の信者」のそれであり、信仰を棄てた「元信者」とは一線を画している。この事実は彼らの「信仰観」を考察する上で重要であり、彼らのその微妙な心理を考える作業をこれから進めてゆかなければならない。なぜかという、端的に見た場合、もう今は信者ではないが信仰は持つ、という特殊な「信仰」、それはもはや「信仰」というよりも一つの特異な「態度」でしかないとも考えられるからである。



写真 12 堺目公民館



写真 13 元触公民館



写真 14 農協



写真 15 浦北の恵比須様（元は波戸の所）



写真 16 漁協選魚場



写真 17 旧渡船待合所



写真 18 浦南の恵比須様



写真 19 道中、島内の保育園に立ち寄り、園児たちの成長を祈る二者。

写真 12～19（2014 年 10 月 6 日筆者撮影）

次に、この行事の行程をまとめる。朝8時に住吉神社の本殿にておくんちの行事が始まる。ここでは神職の舞の後、氏子の役員らによって玉串の奉納がなされ、全体の開始となる。神社での祝詞の奏上が終わった後は、御霊を移した神輿が地区をめぐる。元々、神輿は人の手で運んでいたが、現在では参加人数の減少や高齢化の影響で、トラクターの荷台に載せ地区を回る。神輿は、堺目公民館、元触公民館、農協、浦北の恵比須様（元は波戸の所）、漁協選魚場、旧渡船待合所、浦南の恵比須様と回って神社に戻る。

道中は、猿田彦と見られる役と天鈿女と見られる役が同行する。天孫降臨の古事になぞらえ、神幸では全国的にこの二者が行列を先導するが、この島の信者がこの先導をどのように捉えているのか、ということについても聞き取り調査をした。氏子らによると、この二者は、神様や行列に「悪いもの」が悪さをしないように守護をする役目をしているという。この「悪いもの」とは何を指すのかというと、氏子らの話では、「神様が歩いていると自然の中にいる悪いことをするものが寄ってくる。そのようなものを追い払うために護る役目がいる。」という。これと似た「悪」に関する考え方を、以前かくれキリシタン信仰の行事内で聞いたことがある。

山田地区では神に捧げた御膳をただ単に捨てることはせず、その後自然界（草むらや木の根元）に返すという。また、この御膳を人が食べることは決してしないともいう。なぜ自然界に返すのかというと、これは自然界にいる魔性のものへの「おすそわけ」であると村川氏は語る。「自然界には魔性のものが沢山いる。『魔性』というのは悪魔みたいなものである。それに対して『悪さをしないでください』という思いであげる。」と、このように村川氏は語る。これらを供える場所は、人が踏まないような場所を選び、地面に置く時には「神様からのおすそわけです。どうぞ悪さをしないでください。」⁽⁵⁾と心の中で唱えながら供えるという。

これらから分かることは、自然界に対する彼らの考え方である。氏子や村川氏の話から、この島では「自然界には人知を超えたモノがいる。」「そのモノはあちらから人間に干渉を持つ。」という思想が信仰の根底に流れている、ということが理解できる。しかし、その回避方法については両者では違いを見せている。今回の調査では「追い払う」という方法をとるのに対し、村川氏は「もてなし鎮める」という方法をとっている。これについては信仰による違い、つまり神道行事であったかかくれキリシタン信仰の信仰行事であったかによる違いなのか、地域による違いなのか、ということについて、精査する必要がある、現段階では断言することはできない。

自身の研究では、音楽的な要素から文化の変容を見ようと考えている。そのため、このおくんちの中で神職と巫女によって舞われる芸能に焦点を当ててみたい。各宿では、神輿の前での祝詞の奏上と共に、神楽が舞われる。この神楽は氏子らには「式三番」と呼ばれている。では、この式三番について見ていきたい。神楽の中で使用される楽器は「篠笛・太鼓」の二つであり、また、舞い手によって神楽鈴の使用がなされる。

この神楽は他の日に行われた番岳の「金毘羅神社」の大祭でも同じものを利用している光景が見られた。しかし、この神楽がこの島のみで突然発生したものであるとは考え難い。そこで、古くから交易のあったという平戸島で行われている神道行事を見ることにした。平戸には亀岡神社があり、そこでは「平戸神楽」と呼ばれる国指定重要無形民俗文化財がある。今回、試みとして、この平戸神楽の中に生月島で行われている「式三番」と類似する演目の有無について考察をしてみたい。なおあらか

じめ断っておくが、本考察は、民俗芸能としてのおくんちの研究を目的としてはいない。本研究の目的は、この神楽自体の研究ではなく、この神楽と平戸神楽との関係を考えることで、両地域の信仰行事における影響関係を調べることであり、目的はかくれキリシタン信仰のより深い理解にある。ゆえに、両芸能の影響関係の有無を調べるのが唯一の目的であるため、民俗芸能研究の領域における、芸能の諸要素の包括的な考察は、本研究の範囲外である。

長崎県神社庁によると、平戸神楽は「元禄時代、江戸藩主第29代天祥鎮信公の頃、家臣の橘^{たちばなのみつ}三喜^{よし}が古来から伝わる平戸の神楽を基礎としつつ、諸国の神楽を見てまわり、粋を集めて完成させたのが平戸神楽といわれており、松浦家の手厚い保護を受け現在に伝承されて」きたという。また「神楽の舞は全部で24番まであり、奉奏曲目の数などで小・中・大・大大神楽の4種類に分けられ」る、という。直接の調査ができていないため、映像資料での確認となるが、演目は「太鼓始^{たいこはじめ}」、「荒塩^{あらしお}」、「四本幣^{しほんぺい}」、「二本幣^{にほんぺい}」、「所堅^{ところがため}」、「二弓^{にきゆう}」、「山之神^{やまのかみ}」、「折敷^{おしき}」、「懸り幣^{かかぺい}」、「神相撲^{かみずもう}」、「五方開^{ごほうびらき}」、「注連舞^{しめ}」、「二剣^{まいにけん}」、「幣納^{へいおさめ}」、「四剣^{しけん}」、「神代開^{じんだいびらき}」、「猿田彦^{さるたひこ}」、「四弓^{しきゆう}」、「鉾舞^{ほこまい}」、「供米舞^{くまい}」、「鉦女舞^{うずめまい}」、「手力雄命^{たじからおのみこと}」、「岩戸歌^{いわとうた}」、「八散供米^{やちくま}」となっている。

巫女舞についてであるが、まず演目を比べてみて、巫女舞はない。そのため、「1. 女性と何らかの関係がある演目」、「2. 採物」、「3. 足の運び」、「4. 動作」が類似する演目を挙げてみた。それらを考えた時に「巫女舞」との類似点が見られるのは、「鉦女舞」である。それゆえ、今回はこの二つの演目の比較を行った。神職による舞も、巫女舞と同じように、「1. 採物」、「2. 足の運び」、「3. 動作」の類似点を考え、「荒塩」との比較を行った。

それでは巫女舞から見てゆこう。まず「2 採物」であるが、左手に鈴を持ち、要所要所で振り鳴らすという点、また、その鈴を振った時が方向の転換となるという点は、両者共に見られる。しかし、面の有無という点、榊ではなく、扇を持つという点については生月島の神楽では見られない。源流が平戸神楽にあるのだとすれば、伝承されるうちに簡略化してしまったことが考えられる。次は「3. 足の運び」である。これは舞踊譜に表した。平戸神楽の鉦女舞の特徴としては、四方を固めること、そして円を描くように足を運ぶこと、円を描く際は最初の1回を除き、直前に回ったのとは逆の方向に向かうこと、の3点であろう。次は、「4. 動作」である。採物でも見たが、両者とも両手に舞の道具を持ち、それを振ることで四方の固めや次の動作の転機としている。

次に音楽的な面から見てゆきたい。両者とも、構成音 F/As/B/C/Es/ を持ち、F-B/C-F の完全4度枠を持ち、その積み重ねによって旋律が構成されている。また、その完全4度の枠の中は「短3度+長2度」の組み合わせが構成されていることも確認ができる。そのため、この2曲は「民謡音階」により成り立つと考えられる。自身は、論文「長崎県生月島におけるかくれキリシタンの唄おらしょ——音楽的事例研究——」⁽⁶⁾において生月島の山田地区の唄おらしょである《さんじゅわん様のお唄》が、その地区の唄おらしょや他地区の唄おらしょと歌詞や旋律の面で異なりを見せていることを示し、この曲が他とは違う成立をした、という考察を示した。《さんじゅわん様のお唄》も民謡音階で構成されていた点も踏まえ、研究途中である《さんじゅわん様のお唄》との類似性についても、研究を進めてゆく。

平戸島と生月島の文化的な繋がりについては、島同士が近いことなどの地理的關係で物産の交易があったことが知られているが、今回の考察からまず言えることは、文化的な面での交流もあった、と

いうことである。生月島と同じように平戸島も潜伏キリシタン信者が多い島であった。それは、平戸島が出島先の先駆けとなる、ポルトガルとの貿易港であったことや、この地を治めていた松浦家がキリシタン大名であったことに起因する。しかし禁教令の中では、例外なくこの地もキリスト教が禁止され、殉教者も出ている。そのような中、当時の潜伏キリシタンたちはキリスト教の教義として、文化をお互いに伝えることはなかったであろう。しかし、このように文化の流入が起きていることから、冒頭でも述べたようにカトリックを基にしつつ、その変化の過程で様々な風土と混合し、現在の姿となったかくれキリシタン信仰において、平戸と生月では同一の変化が起きたとも考えられる。現在では平戸においてかくれキリシタン信仰は見られなくなってしまったが、その痕跡を辿る時の一つの足掛かりとなることも考えられよう。

ただし、これについての問題は、多層的な信仰形態を持つかくれキリシタン信仰と、土地の様々な信仰を子細に比較・研究しなければならない。ここまでの研究を起点とし、今後も多角的にそれらを見てゆく。

まとめ

本論文では、長崎県生月島堺目地区を中心として事例研究を進め、多層的な信仰を持つ信者の「かくれキリシタン信仰」「神道行事」の二つを見た。

まず2章「生月島堺目地区の事例研究」では、堺目地区において行われるかくれキリシタン信仰の儀礼を調査し、考察を進めた。この堺目地区の事例からは以下のようなことが分かった。

まず、女性の参加形態に関する、神道との類似点と相違点は、「信仰行事に参加する者が減少することで、女性の参加が認められるようになった。」ということと、「住吉神社の祭礼では女性の行事への直接的な参加が認められるようになったのに対し、かくれキリシタン信仰では認められているのは参加のみ。」ということである。かくれキリシタン信仰では神道的な要素が強い、と先行研究ではいわれてきたが、これらのことから、単に神道の要素が強く出た信仰であるとは言い切れないと考察した。

二つ目は、集団で信仰活動を行うことの重要性である。堺目のように、組織自体解散をしても共同体としての意識が崩れなければ、さらに言えば、集団で信仰活動を行うという行為を守っていれば、「唄おらしょが消滅する」事態は起こったとしても、信仰自体の消滅は起こらない。しかしそのようにして残った信仰は、これまでとは大きく姿を変化させた信仰なのだともいえる。

信仰の中の一つの文化である「唄」という視点から見ても、同じ意識を持つ共同体が集団として、かくれキリシタン信仰を行う重要性が分かる。また、多数の人が集まり同じ所作やことばを発するという行為は文化の変容をより緩やかにし、急激な変化の抑止に繋がっていると考察した。

Ⅲ章の「他文化との接触」では、文化が近隣地域の中で、互いに影響を及ぼしあっていることについて神楽を例にあげ、実験的に考察を行った。この考察からは、文化が人間の意図とは関係なく、人々の交流や物流によって伝播する可能性を示した。かくれキリシタン信仰は、その弾圧や差別という歴史的な背景により、高い秘匿性が守られてきた信仰である。その秘匿性は徹底されていたといえ、たとえ隣の家でも信仰組織が異なれば、信仰については互いに話すことはなかったという。現在

60～90歳の信者らも皆、「若い時、島の外に行って、もし島の人間以外に信仰について聞かれたら『禅宗じゃ』と答えていた。」と話している。弾圧される恐れのない昭和期であっても、そのように信仰内容を口外しないだけでなく、キリシタン信者である事も人に知らせない、という指針を固く守ってきたということからも、彼らの高い秘匿性がうかがえよう。

そのような信仰であるから、潜伏期ももちろん人への信仰についての口外はなされなかったであろう。しかし、このようにして、人が人との交流をした時、互いの文化への影響がある。かくれキリシタン信仰を口に出して他者に伝えた、ということは考え難いが、キリシタンたちの物の考え方や所作など、文化的なレベルでの交流はあったのではないかと考えられる。

本論文において筆者は、長崎県生月島堺目地区のかくれキリシタン信仰と、その変化の過程について事例研究を進めた。そして、信仰形態の変化と共に、信者と信仰対象の関係性も変化することについて考察を進めた。また、この堺目地区の住人は、元々かくれキリシタン信者であり、神道の氏子でもあった。彼らによって行われる神道行事から、近隣の地域の文化的な影響を受けていることも確認をした。

今回は、かくれキリシタン信仰を地域の文化の中から見えてゆく試論を行った。このように試論や考察を積み重ねてゆくことで、今後、かくれキリシタン信仰をさらに多角的な面から研究を進めてゆきたいと考える。

注

- (1) その他、自身らの信仰形態を捨て、キリスト教に入った者たちを「復活キリシタン」というように区分する。この「キリシタン」についての各時代の区分は「年報 非文字資料研究 第11号」において詳細に示した。
- (2) 竹井成美『南蛮音楽 その光と影』音楽之友社：1998
- (3) 小泉優莉菜「近現代におけるかくれキリシタン信仰——信仰形態の変化要因に関する一考察——」神奈川大学歴史民俗資料学研究科 修士論文：2013
- (4) 小泉優莉菜「長崎県生月島におけるかくれキリシタンの唄おらしょ——音楽的事例研究——」『年報 非文字資料研究 第11号』：2015年3月
- (5) 小泉優莉菜「かくれキリシタン信仰における「御膳」の事例研究」『風俗史学』第58号 風俗史学会 2015年3月
- (6) 小泉、前掲：2015

参考文献

- 井上章一 2001『キリスト教と日本人』講談社
- 海老澤有道 1983『洋楽伝来史——キリシタン時代から幕末まで』日本基督教団出版局
- 岡田章雄 1975『キリシタン風土記』毎日新聞社
- 片岡弥吉 1989『長崎のキリシタン』聖母の騎士社
- 1967『かくれキリシタン 歴史と民俗』日本放送出版協会
- 久田松和則 2002『キリシタン伝来地の神社と信仰——肥前国大村の場合——』富松神社再興四百年事業委員会：
- 小泉文夫 1958『日本伝統音楽の研究』音楽之友社
- 小泉優莉菜 2013「近現代におけるかくれキリシタン信仰——信仰形態の変化要因に関する一考察——」『神奈川大学歴史民俗資料学研究科 修士論文』神奈川大学

- 2015「長崎県生月島におけるかくれキリシタンの唄おらしょ——音楽的事例研究——」『年報
非文字資料研究』第11号非文字資料研究センター
- 2015「かくれキリシタン信仰における「御膳」の事例研究」『風俗史学』第58号風俗史学
- 重松一義 1996『東北隠れ切支丹弾圧の研究』藤沢町文化振興協会
- 1987『聖書 新共同訳』日本聖書協会
- 田北耕也 1978『昭和時代の潜伏キリシタン』国書刊行会
- 竹井成美 1998『南蛮音楽 その光と影』音楽之友社
- 中園成生 2011『平戸——海外に開かれた自由な港市——』平戸市教育委員会
- 正木慶文 2003『長崎隠れキリシタン記』新潮社
- 平戸市生月町博物館・島の館 2000『生月島のかくれキリシタン』平戸市生月振興公社
- 文化庁 1977『日本民俗地図V』資料編95 国土地理協会
- 松田毅一監訳 1991『十六・七世紀イエズス会 日本報告書』第三期第六卷
- フランシスク・マルナス 久野桂一郎訳 1985『日本キリスト教復活史』みすず書房
- 丸山孝一 1980『カトリック土着——キリシタンの末裔たち』日本放送出版協会
- 皆川達夫 2004『洋楽渡来考——キリシタン音楽の栄光と挫折』日本キリスト教団出版局
- 宮崎賢太郎 2001『カクレキリシタン——オラショ魂の通奏低音』長崎新聞新書
- 1996『カクレキリシタンの信仰世界』東京大学出版会
- 宮田登他 1983『日本民俗学概論』吉川弘文館
- 柳田國男監修 1951『民俗学辞典』東京堂出版
- 山本博文 2009『殉教 日本人は何を信仰したか』光文社
- 結城了悟 1999『キリシタンになった大名』聖母の騎士社